

ギアを上げて

もう九月も終盤に差し掛かり、セミも鳴かなくなってきたている。

ここからもう一段、時間がギアを上げて十二月まで突っ走るのが例年の流れである。

先日、第七期定期株主総会を開催し、お忙しい中、多数の株主様にご出席頂きました。ありがとうございました。当方が代表を務めるようになって四期目を終えたことになりましたが、なかなか業績の改善も見え出来ず、株主様には大変申し訳なく思っており、この場をお借りして改めてお詫び申し上げます。

経営的にも非常に難しい局面を迎えているのは偽りのない事実ですが、ここが踏ん張りどころと、少数ながら社員一同踏ん張っているところであり、今しばらく見守って頂けると幸いです。

若干、話が暗い方に行きかけましたが、明るい方に話を移しますと、京都大学大学院・木村亮研究室におかれましては、澤村先生を中心に九月十三日に開催された第七十二回土木学会年次学術講演会及び九月二十五日には環境地盤シンポジウムにて論文発表して頂きました。

早々にご報告を頂いているのですが、いずれもリアクションは良く、澤村先生に、営業担当を担って頂いております。ありがとうございます！

そして、このような格式高い舞台で我らがセルドローンの論文発表がなされるなど、いまだに夢見心地である一方しっかりと地に足を付けて進んでいることを実感している。

また、九月中旬には北海道にて全地連主催「技術フォーラム2017 旭川」が開催され、ブースを構えさせて頂きました。

全国の設計コンサルタントが一同に会す機会とのことで、

松山・東昇商事・河崎取締役から再三再四、出展を、施され、ましたが、早々に販売に繋がりに、さすがにイチオシの展示会であったと大変感謝致しております。

ありがとうございます。

これから年末から年度末にかけて静岡県新潟県、愛媛県で大型案件のお引き合いを頂いています。

GNN主催の「残コンフェス」で全国的にも知名度急上昇であり、また福島において復興需要以外の実績も積み重なってきていると

販売店のジオ・インスペクション様よりとてもうれしいニュースが届きました。

更には、我々が保有する特許及びその技術につき大変興味があると、海外の企業2社からアプローチがあり、近々お会いすることになりました。

さてさて、前半は暗かったですですが中盤以降、沢山の光明が差し込んでいる今月号時の流れが一層早くなるこの時期我々自身も乗り遅れないようにしていかなければ、と思っ直しているところである。

藤井 成厚

ポイント

バキューム車いらすう？

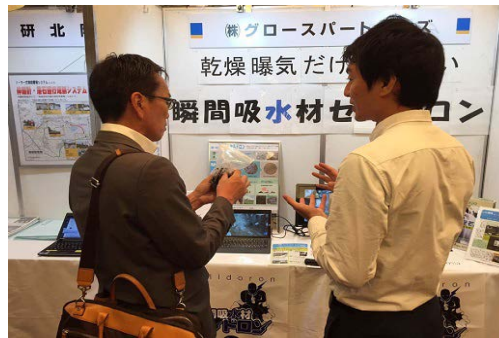
九月十四日(木)と十五日(金)に*全地連主催の「技術フォーラム2017」旭川にセルドロンブースを出展してきました。

*全地連とは、「一般社団法人全国地質調査業協会連合会」の略です。

当日のブースの様子



「乾燥曝気だけじゃない」のPOPを作成し、目視によるキャッチをアピール



今回は初めて地盤調査会社やコンサルタントが集まる展示ブースなので、セルドロンの瞬間性と効果を体感いただくため、いつも通りの泥土改質キットを準備いたしました。

今まで推進してきた土木建築関係と来場者が異なり、初めてご挨拶させて頂く方ばかりでしたが、この業界でもセルドロンが必要という事が判明しました。例えば、地盤調査をする際に発生する泥水処理問題。

工事の規模や工法にも異なりますが、五十リットル程度の泥水処理するために、バキューム車を使っております。

一般的なトラックに比べバキューム車は高額なため、たかが五十リットルの泥水に五万円程度の費用が発生するそうです。そのため、現場等に流してしまうような悪質なケースもあるようです。

セルドロンを使う事により、バキューム車を使わずに処分する事が出来れば、扱いも楽になりますし、半額以下になるのではないかと盛り上がりました。さらに泥水が多い井戸工事などにも使えます。

今後、現場にて試験施工が行われますので、随時更新させていただきます。

new

セルドロン研究員 X のコラム 「テーマ 土壌汚染を考える」

日本の土壌汚染の歴史は古く明治初期に足尾銅山で発生しました。原因は銅や鉛毒ガスで周辺環境が汚染されてしまいました。この時はまだ様々な成分が、環境に影響するとは考えられなかったようです。もちろん近年では、しっかりと規制されていますが、まだまだ増えていくことが予想されます。

最近ですと、東京では豊洲新市場で水質汚染や土壌汚染で、毎日ニュースになっていきます。この話題はまだまだ続きそうな雰囲気ですね。そこで勝手ながら、日本の土壌汚染について少し考えてみました。データは少し古いですが、図1は、日本の土壌汚染の件数を示したものです。

傾向として、増加傾向にあることがデータから観察されます。一番多いのがヒ素や、カドミウム等の重金属で、自然由来の土壌汚染です。

人為的に汚染をもたらしたかといえ、そうでもなく、もともとその地域の土壌に多く分布していたのが原因です。

もちろん産業活動等で汚染が引き起こされたこともあります。もっと深刻なのは、雨によって地下水へ流れ込み、河川や海洋へ汚染物質がながれ込み、魚などの生物に高濃度に濃縮されてしまうことです。

その魚を私たちが食べて、健康を害してしまう二次汚染がはじまっています。これら問題を克服するために、研究機関で化学的処理、物理的処理等を含めた技術開発がされていますが、費用対効果が課題となっております。日本には土壌汚染防止法で食い止められている一方で、まだまだ問題が山積しているのが現状です。

次回からは、これらをいかに防止するかを「自分なりに」考えていきます。

図1 土壌環境基準等超過事例数の推移 (環境省ウェブサイト「環境統計集『5.31 土壌環境基準等超過事例数の推移』」を基に筆者作成)

